

紙上法話

その先を見据えて

鳥取県 梅翁寺住職

倉瀧 英信



新年度もスタートし、私たちの身の回りも社会生活も円滑に進んでいる頃ではないでしょうか。宗門においては太祖瑩山紹瑾禅師さま七百回大遠忌正当の大切な年となっております。「相承」の思いを踏まえ、宗侶一人ひとりが次世代にみおしえを伝えていかなければなりません。

この大切な年に弟子が安居することとなりました。私が三十年前に安居させていただいた時と比べ、準備物等にも少しづつ変わっている部分があるようです。学生生活と一八〇度変わる環境に不安しかないとありますが、傍らで見守る私自身も同様にかつての自分を見ているようで気持ちがよく理解できました。

出発する前には若い方丈さまに点検も兼ねご指導願いました。懇切丁寧な説明の中に、変わらぬこと、新たに学ばせてもらうこともありました。その方丈さまからは「自分で修行に行くと決めたのだから、やらされていると思つて行動してはならない。そのためにはしっかりと自分を律すること。」と弟子にお声かけいただきました。

『正法眼蔵随聞記』には、「学道の人は後日を待つて行道せんと思ふ事なかれ。ただ今日今時を過ごさずして、日々時々を勤むべきなり」と示されています。道を求めていこうとするならば、今一番法縁が熟している。ここで決めた気持ちと大事に精進する、方丈さまの温かく厳しいことばに道元禅師さまから連なる一端を感じずにはいられませんでした。

今般の弟子の安居に際しては、檀信徒の皆さんにもとても温かく見守っていただき、本当に感謝しています。幼少の頃から声かけ、励ましていただきました。出発時も寒風の中、見送つて下さったことは弟子本人も生涯忘れることなく、その時の心情を将来へとつなげてくれると願っています。

瑩山禅師さまが記された『洞谷記』「当山尽未来際置文」において、

「篤信の檀那之（これ）を得る時、仏法、断せず」
「檀那を敬うこと仏の如くすべし」

と記述があります。篤信ある方に対し仏さまのように敬い接することによって寺檀関係が深いものとなり、正伝の仏法が脈々とつながってまいります。

瑩山さまが歩まれた時代は経済面も含めご苦労が多かっただろうと想像できます。道元さまより伝えられた尊い教えを寺檀一体となって広めるべくご尽力されました。その篤い行動こそが瑩山さまの思いに共感する方の一歩となり、今日の宗門各寺院の礎を築き上げたといえます。

しかしながら現在、宗門寺院を取り巻く環境は難しい状況となり、人口減少による檀信徒減少も進んでいます。篤信ある方は貴重な存在となっております。社会が大きく変化する中において、瑩山禅師さまの置文は時代を超え、私たちに伝えようとなさっていると感じます。今一度檀信徒あるいは支援者との関わりを確認し深め、瑩山さまの思いも併せて次の五十年に向け慈恵に酬いるようつとめたいものです。